

特集

結核・非結核性抗酸菌症

—エキスパートが教える 実臨床に役立つ最新知見—

本邦において、古の時代、結核は国民病であった。経済、文化、戦争、地域性など、様々な背景によって姿を変え、現在でも多くの人々が影響を受けている。ロベルト・コッホが結核菌を発見して以来、多くの医学者が結核撲滅に対し努力を続け、診断、治療、予防対策を確立してきた。医学の発展のなかで結核病学が果たした役割は大きい。

現在、本邦では結核が減少し、臨床上「遭遇しないであろう領域」と思われていないか、不安となる。30年以上結核に携わると、頭が結核だらけとなってそのように思うのかと自省するが、「予防可能例」の患者さんを目にすると、また、その不安が頭をもたげてくる。

一方、非結核性抗酸菌症は、第三の国民病になろうとしているかのごとく、患者数が増加している。環境に生息し、環境から人への感染が日常生活のなかで生じる可能性が高く、潜伏期も感染の証拠も、病巣成立の経過も明瞭ではなく、治療法はほとんどの菌種において確立していない。予防法すら確立していない。疫学や遺伝子分析では多くの論文発表がなされるようになり、非常に喜ばしい時代となった。しかし、患者さんから「私は治らないのですか？」と問われると、「100%、否！」と言い切れない。無力感に打ち負かされる日も多い。

今、時は流れ技術は必ず進んでいく。若手の医師が多く抗酸菌学を志し、この疾患の克服に日夜努力を続けてくれている毎日を、筆者はそっと見ている。

本特集が、医師が、結核および非結核性抗酸菌症の患者さんの傍らで手に取って参考になる本となることを願っている。「この先生の本を読みたい」と望む若手臨床医のために、今まさに結核・非結核性抗酸菌症に正面から取り組んでおられる先生方にお書きいただいた。

大変ご多忙のなか、素晴らしい論文を送り出してくださった諸先生方に、深い尊敬と大きな感謝を込め、この場をお借りして御礼を申し上げます。素晴らしい論文をお寄せいただき、ありがとうございました。

最後に、頼りない筆者を支えてくださっている NPO 法人非結核性抗酸菌症研究コンソーシアムの皆様、また、毎日の診療において、筆者に何かと手助けし、助言をしてくださる複十字病院の同僚達に、この場をお借りし深謝いたします。

結核予防会 複十字病院 副院長

佐々木結花